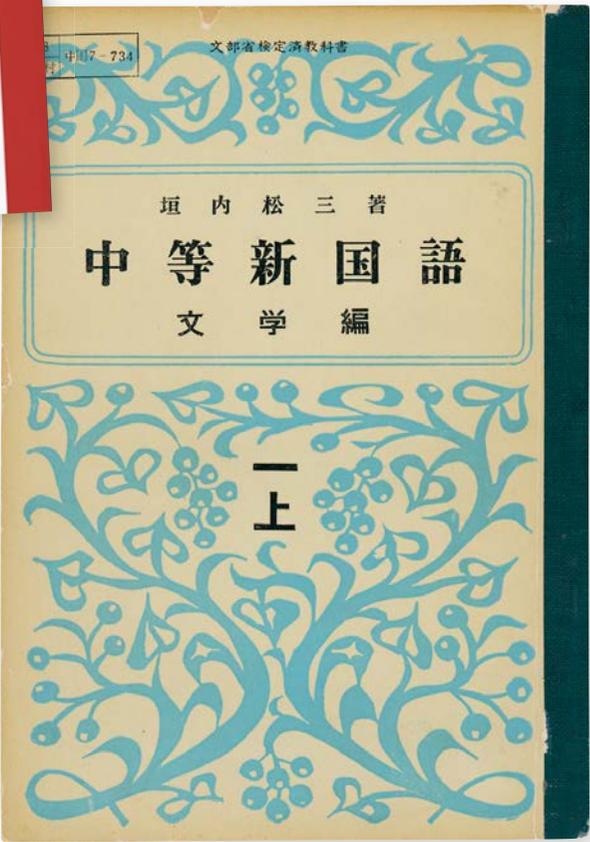


『国語』教科書の

歩み

光村図書は、一九四九年に創立され、小・中学校の国語の教科書を中心に発行を続けて、今年で七十周年を迎えました。

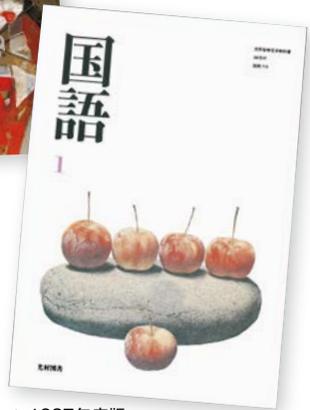
この間、中学校『国語』教科書はさまざまな変化を遂げてきました。その変遷をたどりながら、教科書に込められた願いを振り返ります。



▲1952年度版



▲1981年度版



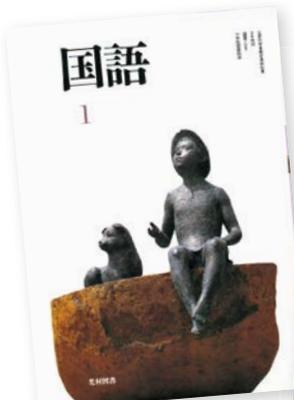
▲1987年度版



▲1993年度版



▲1997年度版



▲2002年度版

変わるもの、 変わらないもの

中学校の国語教科書『中等新国語』（文学編・言語編）が初めて発行されたのは、一九五二年。前年にはサンフランシスコ平和条約が締結されるなど、日本が新たに戦後の道を歩み出す中での出発でした。

『文学編』を見ると、小説、詩歌、古典、論説、随筆、新聞記事、伝記、戯曲、シナリオなどが、『言語編』では、「討論のしかた」「実用的な手紙の書き方」「創作」など、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことが収録されています。全体的には、現在の教科書とそれほど大きな違いがないことに驚かされます。

この『中等新国語』が基盤になり、以来、

二十回余りの改訂を重ねながら現在の教科書に至っています。この間、学校教育法施行規則に定める中学校三年間の国語の授業時数も、六九年の525時間を最大に、九八年には最小の350時間と大きな変動がありました。これに伴い、教科書のページ数も最大383ページ（七二年度版一年）から、最小269ページ（二〇〇六年度版一年）と、動いています。判型も当初のA5判から、〇六年度版を境にB5判へと変わりました。

また、〇二年度版からカラーページも増え、現在ではほとんどのページがカラーになりました。子どもたちの興味・関心を高めることはもちろんのこと、特別支援教育の観点からも子どもの学習のしやすさに寄り添ったデザインに変わってきています。

体裁の面で光村の中学校教科書の大きな特徴として挙げられるのは、表紙の質感と堅牢さです。一九八七年度版から一貫して、表紙には独自の手触りのある用紙を使い続けています。中学校三年間だけでなく、ずっと大切にしたいという願いを込めて、汚れや擦れ、水濡れに強い材質を使い、手になじむような用紙を開発しました。卒業してからでも、教科書を手にするたびにその手触りで国語の授業を思い起こしてもらえませんか。



▲初代（1993年度版）

歴代の 「かまきりりゅうじ」

「野原はうたう」が最初に掲載されたのは1993年度版でした。なかでも「かまきりりゅうじ」は生徒たちの人気者です。歴代のイラストをご紹介します。

（イラスト 初代：渡辺リリコ
二～五代目：保手浜 孝）



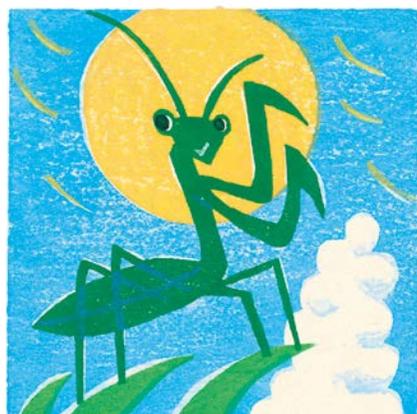
▲二代目（1997年度版）



▲三代目（2006年度版）



▲四代目（2012年度版）



▲五代目（2016年度版）

教材の変遷

長い歴史の中で、教材も変遷を続けてきました。現在、定番教材といわれているものの初出年度をいくつか挙げてみます。

「少年の日の思い出」一九五五年

「坊っちゃん」一九五九年

「走れメロス」一九六一年

「故郷」一九六六年

「大人になれなかった弟たちに……」一九八七年

「ちよつと立ち止まって」一九八七年

「野原はうたう」一九九三年

長く掲載されている教材でも、時代によって指導のねらいや紙面構成は大きく変わっています。学習の手引きの特徴的な部分（抜粋）を比べてみましょう。

「少年の日の思い出」

●一九五五年度版

この作品には、どんな価値があるか。

●一九六九年度版

「ぼく」が自分だったら、どうしたと思うか。

●一九八七年度版

「僕」が自分の収集を押しつぶしてしまつたあと、夢を見たとしたら、どんな

夢だろうか、想像して書いてみよう。

●二〇一六年度版（現行）

「僕」の考え方や感じ方について、共感するところや疑問に思うところを話し合ってみよう。

「走れメロス」

●一九六一年度版

筆者はなにを書き表そうとしたのか。友情について、みんなて話し合おう。

●一九六九年度版

どの場面に感動したか、それはなぜか、考えてみよう。

作者は、この作品でなにを表現しようとしたのか。主題について考えてみよう。

●一九八七年度版

この作品で最も心を打たれたのはどのようなことか、その事柄や場面について話し合ってみよう。

●二〇一六年度版（現行）

「メロス」の行動や考え方について、共感できたところや、できなかったところを、その理由と共に考えてみよう。

時代が下るとともに、生徒の主體的な読みを尊重するようになつてきたことがうかがえます。

世代を超えて 受け継がれる 教科書を目ざして

「えんぴフライ」「ヤンおばさん」「ルビンのつぼの挿絵」……。前号の「国語教育相談室」（一八年九月発行・87号）収録の「社会人20人に聞く、覚えていますか？ 文学の授業」でもご紹介しましたが、あら筋は覚えていなくても、心に残っている主人公や挿絵はあるでしょう。

教科書教材は、同じ時期に同じ教科書で学んだ友達どうしの共通の話題となりうるものではないでしょうか。そして、祖父母や親の世代も親しんできた教材が今も掲載され、世代を超えた共通の話題ともなります。

これからも光村図書では、時を経てあせす、人々の心の中で熟成され続ける教材を多く生み出してまいります。教科書づくりを通して、文化を創造していくこと、それが七十周年を迎えた光村図書の願いです。

あの教材に 再び出会いたい

これまでに生まれてきたたくさんの教材の中で、今なお継続しているものもあれば、時代の流れの中で使命を終えたものもあります。各年代の教材の一覧は、小社ウェブサイトに「教科書クロニクル」に掲載しています。かつて学習した懐かしい教材に出会えるかもしれません。ぜひご覧ください。

また、現在の教科書には掲載されていないものの中から、特に評判の高かった作品を『光村ライブラリー 中学校編』に収録しています。文学（三巻）・説明文（一卷）・詩（一卷）の全五巻の構成となっております。詳細については小社ウェブサイト「一般書籍」内の商品ページをご覧ください。



▲「光村ライブラリー 中学校編」（全5巻/各巻本体1,000円+税）

先生方と編集部とをつなぐ懸け橋 「国語教育相談室」

「国語教育相談室」は、日々の授業に役立つ教材研究のための資料や実践事例、最新の教育情報などを掲載し、先生方と教科書編集部とをつなぐ懸け橋としての役割を担っています。

創刊は、1957年5月。一昨年“還暦”を迎えました。

創刊号には、編集委員だった国語教育学者の石森延男先生がこんな巻頭言を寄せています。

国語科の学習は、「ことば」に始まって、「ことば」に終わるといってもいいほどで、(中略)ことばというものをもっていることに気づくと、子どもたちの目は、にわかには育ってくるものです。ものを見る目が、成長してくるからです。いいかえますと、「考える力」が生まれてくるのです。国語科の目標は、一口に言えば、この「考える力」をつけることにあるといってもいいほどです。

ここには、現在移行期を迎えている新しい学習指導要領の理念に通底するものが、既に語られています。

光村図書は、これからも子どもたちの「考える力」を育む教科書と、それを支える先生方の一助となるような充実した「国語教育相談室」を発行してまいります。



教科書クロニクル

あなたが小学生・中学生だったころ、国語の教科書にはどんなお話が載っていたでしょう。「教科書クロニクル」で記憶をたどってみませんか。「あのころのわたし」の懐かしい思い出が、よみがえってくるかもしれません。



▲「教科書クロニクル」には過去教材の一覧を、「教科書 time travel」（小学校）には教材の編集にまつわるエピソードを掲載。